

去来・其角・許六それぞれの不易流行

——芭蕉没後の俳論のゆくえ「答許子問難弁」まで——

藤井美保子

芭蕉没後の蕉門中人の中でも、京都にあつて同門の信望厚く西の要となつている向井去来と、湖東彦根で武家を中心とした彦根蕉門を形成した森川許六の關係は、とりわけ彼らが交わした俳論によつて文学史に著名である。実作者である彼らの俳論に意見の相違はあつても作品と論の乖離はなく、議論は謙虚であり真摯で鋭く、創作過程の内部や秘密を自ら示す開明さに満ちている。蕉風俳諧における理論や実践において、彼らは忌憚のない意見を交わし相互理解を深めていたが、根本理念の一つである「不易流行⁽¹⁾」の取扱ひに関しては見解が一致することはなかつた。この「不易流行」をめぐる去来・許六、また論争の発端となつた其角、三人の立場を紹介しつつ、それぞれの不易流行を考えたい。

一 去来——流行の句——

よく知られるように芭蕉自身が書き留めた「俳論」は今日見ることがなく、すべて門人達が祖述したものである。蕉風俳諧と俳論について山下一海氏は次のように言われている。

○芭蕉の俳論については純粹に芭蕉個人のものではなかつたという

ことは念頭においておかななくてはならない。

○芭蕉俳諧は、孤独な芸術としてというより、蕉門の形成とともに生成発展してきたものであり、その俳論は個室での思惟によるものではなく、門下との対機説法のうちに醸成されてきたものである。芭蕉存命中はその俳論にとつて芭蕉自体が大きな錘の役割を果たした。芭蕉俳論がほんとうに流動的になるのは、芭蕉没後、彼が錘の役を果たさなくなつてからのことである。

『風雅のまこと・蕉風俳論の展開』

去来は許六よりも六年ほど早く貞享二、三年(1685)三十四、五歳の頃には芭蕉に入門しており、元禄二年(1686)のおくの細道の旅で開眼したといわれる「不易流行」についても早く教えを受けていた。元禄七年三月と推定される出羽酒田の不玉にあてた去来の書簡は、「不易流行」および「不易流行」に裏付けられる「かるみ」について、初心の不玉にも懇切な文章で認められている。

去来曰く、「俳諧に千載不易の姿有り。一時流行の姿有り。

我師これを両端に分て教へ、しかも其血脈貫通す。貫通するは、共に實地に立てば也。不易の姿をしらざる時は、其の本行はれ

がたし。流行の姿を知らざる時は、伏して動かさず。物動かざる時は変ぜず。変ぜざる時は新たなならず。此道は心・辞共に新しみを以て命とす。是流行の句の行はる、所以也。能く流行する時は活々然として万歳を経て新たな也。久しく留まる時は濁りて重し。今軽みを用ふるは当時の流行にして往時の変風なり。

此を察し給へ

前半部分の意味するところは、「俳諧には時代を経ても価値の変わらない不易の句と、時代の変化とともに現れる流行の句がありませぬ。師芭蕉は俳諧の姿を不易と流行両端二つに分けて教えられました。全身に血脈が通じているようにその二つを貫いている根本は一つであります。貫いているというのは共に実地―まことの地―に立っているからです。不易の姿を知らなければその本である実―まことに立って句作はおこなわれず、流行の姿を知らなければ安穩として動くことはありません。動かなければ変化もなく、新たなこととはおこなないのです。」となろうか。そしてここにいる「貫通するは、共に実地に立てば也。」という表現は、三年後の元禄十年閏二月、去来が新風に移らぬ其角を難詰した「贈晋子其角書」のなかでは、「一なるは、ともに風雅のまこととれば也」と「風雅のまこと」という言葉に置き換えられてくる。

さらに書簡の続きは、「俳諧の道は心も言葉も、共に新しみを以て生命とするものです。それゆえその時代の流行の句―新しい句が出現してくるのです。時代とともに句風がよく流行変化する時は、水が流れるように永久に新たなものがあり、久しく止まる時句は不

透明に濁って重苦しい。軽みは当代の新風であり、往時の変風なのです。ここを理解なさってください」と結ばれる。ここに述べられた去来の「不易流行」と「軽み」の關係は次のようにまとめられる。①俳諧の句の姿には千載不易と一時流行の二様があり、その根本は共に「実―まこと」只一つである。②「千載不易」は時代を超えて存在する正風であり、「一時流行」は万歳を経てなお新しく俳諧の命である新しみをもたらす。③その為濁りや重くれに無縁な軽みを用い、流行によって新しみに―新風を呼び起こすのである。頼原退蔵氏は去来、許六、土芳の説をとりあげて「不易流行」の根本を次のように述べられる。

此の如く門人たちの伝へる所を比較考察してみると、不易流行の二つはその本は一つで、共に風雅の誠から出るといふ考はすべて一致している。案ふにこれは芭蕉が最も根本的な考へ方として常に説いた言葉であったので、門人たちもこの原理だけでは何人も誤解する所はなかつたのであろう。

〔俳論史〕頼原退蔵著作集・巻四)

しかしこの後、「不易流行」が創作に臨む時の第一の理念といえるか、また「不易」と「流行」は別のものとして行われるものか、といった議論が起こってくるのであり、ここに撰集編集の意見交換の文通が頻繁に行われていた森川許六が登場してくることになる。

二 去来と許六の交友

去来と許六の文通は、許六が江戸で九か月あまり芭蕉の親炙を受

けたのち、元禄六年五月彦根に帰った後に始まる。芭蕉は許六宛五月四日付書簡で

御帰国なされ候はば、去来へ御通しなさるべく候。拙者方よりも申し遣すべし。是も一人一ふりあるおのこにて、尚白ごときにやくやくものにては御座無候

と、去来との文通を薦めている。この芭蕉の配慮は許六が盟友李由とともに俳壇を彦根で経営するにあたって幸運なことであった。芭蕉は、許六が芭蕉を深く敬慕しており、余人の言説に耳を貸すことは難しいと洞察したのである。実際、許六は芭蕉の指導を受けたのちはおもて手ほどきをうけた大津の尚白はもとより、自句に点評をしてもらった、其角すら「俳諧稽古に益なし」と考えている。明照寺李由は元禄四年落柿舎に去来・芭蕉を訪問し、入門しているの⁽⁵⁾で、李由を介した交友はそれ以前からあったと思われるが、尊敬する芭蕉の一言でさらに胸中を開くことができたであろう。その後の彼らについては元禄七年許六あて芭蕉書簡に「去来へ御状度々、御作力感心の旨驚たる申分に候て、拙者大悦少なからず候。」とあり、また許六にとって、去来との文通は俳諧理論確立の契機であった。

三 其角 — 不易を知る人 —

芭蕉という偉大な師を失って、やがて蕉門門人達はそれぞれの蕉風を実践していく。支考、惟然、野坡は中国地方や九州へ蕉風伝播の行脚へ、桃隣は芭蕉を偲んで奥羽行脚に向かった。一方其角は江戸で都市風俳諧に傾倒していき、文章は義仲寺で芭蕉の墓を守る中

で己の俳風を透徹させていく。

芭蕉没後の日々が過ぎていった元禄十年冬、許六は風国の選集『菊の香』において、宝井其角が去来の書簡を省略改変し、選集『末若葉』の跋文に使用したことを知った。ここには去来が其角に書簡「贈晋子其角書」を贈って、新風―かるみに移ろうとしない其角を非難した経緯があった。そして許六が去来に書を寄せて世にいう「俳諧問答」がはじまるのであるが、許六の反応の前に其角の真意がなんであったのかを考えておきたい。

去来「贈晋子其角書」の冒頭部分だけであるが、其角によって省略された箇所を網掛けにし追加訂正された箇所を□で囲んだものを次に掲げる。

故翁奥羽の行脚より都へ越給ひける比、当門の俳諧一変す。我が輩、笈を幻住庵に荷ひ、棒を落柿舎に受けて、略そのおもむきを得たり。「ひさこ」さるみの「是也。其後又一つの新風を起こさる。『炭俵』『続猿』是也。去来問曰、「師の風雅見及処、次韻にあらたまり、『みなし栗』にうつりてよりこのかた、しばく変じて門人、その流行に浴せん事を思へり願へり。我是を古翁に聞けり、句に千載不易のすがた有、一時流行のすがた両端有。此を両端におしへ給へども、その本一なり。一なるは共に風雅の誠をとればなり。不易の句を知らざれば本立がたく流行の句を学びざれば風あらたならず。能不易を知る人は、往くとしておし流行にうつらずといふ事なし。「贈晋子其角書」残された箇所をつなげば次の『末若葉』跋文「贈晋涉川先生書」

冒頭となるが、「師の風雅見及処」などは其角が師であるかのようである。

去来問、師の風雅見及処、『みなし粟』よりこのかたしば／＼変じて門人其流に浴せん事を願へり。我是を古翁に聞けり、句に千載不易、一時流行の両端有。不易を知る人は流行にうつらずといふ事なし。〔贈晋涉川先生書〕

山下一海氏はこの『末若葉』跋文における其角の行為を「『流行』に議論が及ぶことを避けようとする其角の意図が現れている」として、跋として掲載するために、①文章を簡潔にし、②技巧に手を加え、③俳諧芸術の根本を強調しない、④「流行」を強調せず、⑤其角自讃の語を加える、とされておられる。

この時其角は去来に何の返事も断りもせず跋に利用しているのであるが、小宮豊隆氏は、「その（去来の）文章の方々に手を入れたといふ事と、それを跋にして出版しただけであると黙って一言の返答もしなかつたといふ事には、確かにはつきりした其角の批評があるといへる」（『芭蕉の研究』小宮豊隆）と言う。それは流行に重きをおかない、「不易を知れば流行に移らないことなどない」とする『末若葉』跋文こそが其角の去来への反論であり返書であった。

其角を知るために、今一つ挙げたいのは元禄四年、「おくの細道」の旅をへて、芭蕉が新風を示そうとしたといわれる『猿蓑』における有名な其角序文冒頭である。

猿蓑集卷之一冬 巻頭発句

初しぐれ猿も小蓑をほしげ也 芭蕉

俳諧の集つくる事、古今にわたりて此のおもて起す時なれや。

①幻術の第一として、その句に魂入ざれば、ゆめにゆめ見るに似たるべし。

②久しく世にとゞまり、ながく人にうつりて、不変の変をらしらむ。——中略——

③たゞ俳諧に魂の入りたらんにこそとて、我翁行脚のころ、伊賀越えしける山中にて猿に小蓑をきせてはいかいかの魂を入れたまひければ、たちまち断腸の思ひを叫びけむ。あだに懼るべき幻術なり。

幻術という難解な語が現れるこの序文を理解するには、其日庵馬場錦江の嘉永二年成稿『七部通旨』の解釈が助けとなるので、①②③節の錦江通釈を記す。

①幻術はかたちなきものを目にもみせ耳にきかすようにあらしむる其てだてなり。俳諧は無心のものに魂を入れてはたらかするの幻術をなすの道也。一句に魂の入る時は不思議の妙あること、このさるみの、の吟の如し。魂入らざれば其心もさだかならず。夢に夢みるに似たるべしと幻術の綱領をあげて示されし也。

②其幻術のしるしを言へば、この道の流行して久しく世上にとゞまり長き世の末までも人にうつりて地に落ちず、天地自然不易の変化をしらしむは此道のいさをし也。姿情はひさご集にわか

れ、花実はなみは猿蓑集さるもみぎにととのひ、炭俵集すすりは変化の中の曲節まがひにして、俳諧はいかいにも三辺さんぺんと知るべしと申されし、是を不変ふへんの変へんとも申すべきにや。

③翁おきなの幻術まじないは深く懼るべき事なりと、幻術まじないの誠まことを爰こゝに言ひて、俳諧はいかいに魂たまを入れるべき事をしめさる、也。——中略——あだといへる詞ことばは正ただしからぬ人をうらむるがごとく、翁おきなの幻術まじないをふかく恐る、が意いなるべし。

猿さるに小蓑こもみぎをさせ俳諧はいかいの魂たまを入れ、たちまち断腸だんちやうの思おもひを叫こゝろばせた、とは錦江にしんがわ積つみ①にいう「俳諧はいかいは無心むしんのものに魂たまを入れてはたらかするの幻術まじないをなすの道みち」であるほかはない。また序文じぶん②の「久ひさしく世よにとまり、ながく人にうつりて不変ふへんの変へんをしらしむ」は、俳諧はいかいが幻術まじないである証あかしとして古今ここんに亘わたり人々ひとびとに継承けいじやうされて不滅ふめつであること、さらにその「天地自然てんぢぜんぜん不易ふいぎ」の変化へんかを示しすことが功績こうせきであるとも解釈かいしやくされている。芭蕉ばしやうが生涯せいぎやに自己じこの俳風はいふうを三変さんへんした変遷へんせんはその「不変ふへんの変へん」を示しすといえる。

また『贈晋子其角書』の中で去来きょらいは其角そのかくが師しの吟跡ぎんせきに追隨しゆいしないことを「同門どうもんの恨うらみ少なからず」としているが、山下一海さんか氏は其角そのかくの「風雅ふうがの誠まこと」や「流行りやう」への態度たいどについて次のように述べておられる。

「風雅ふうがの誠まこと」を強調きやうきやうしないことと、「流行りやう」に重おもきを置おかないことをもつて、其角そのかくの俳論はいろんと見みなしてさしつかえない。——中略——其角そのかくは「流行りやう」ということや「風雅ふうがの誠まこと」というそのものよりも「不易ふいぎ」と「流行りやう」と、その根底こんていの「風雅ふうがの誠まこと」と

いった、一種いっしゆの構造論こうぞうろんめいたものに我慢まんまんならなかつたのだと思おもわれるふしもある。⁹⁾ 〔芭蕉俳論の展開〕山下一海

牧藍子まきい氏は「詞ことばも心こゝろも古ふるけれども、作者そしやの誠まことより思おもひあぬるゆへ、時に新あらたしく、不易ふいぎの功こうあらはれ侍まをる。」(雑談集)という其角そのかくは「風雅ふうがの誠まこと」ではなく、「作者そしやの誠まこと」に不易ふいぎ性の根本こんぽんをおおいて、という特殊性とくしゆせいについて指摘しちやくされている。それは錦江にしんがわによって③「幻術まじないの誠まこと」と言いわれるものであろう。けだし其角そのかくにとって、新風しんふうとはいいえ時代じだいによって規定きぎんされる「流行りやう」に支配しはいされるよりも、俳諧はいかいに魂たまを入れ幻術まじないをおおこし、「万代まんたい不易ふいぎ」の句くに長く名なを残のこすことが重要じゆうじやうであつたのではないか。其角そのかくが芭蕉ばしやうの「幻術まじない」に衝撃しやうげきをうけ、恐懼おそしたことは想像さうぞうに難がたくない。

一方いっぽう許六きよくは蕉門しやうもん入門にんもん時の元禄げんろく五年ごねん深川ふかがわ芭蕉庵ばしやうあんで、自句じこへの其角評そのかくへいと芭蕉評ばしやうへいの相違さうゐについて問といたただしており、其角そのかくの価値観かちかんや俳風はいふうについて去来きょらいよりも柔軟じゆんぜんであつた。こうした背景はいけいのもと去来きょらい「贈晋子其角書」に対し、許六きよくの「贈落柿舎去来書(俳諧問答)」が贈たまられるのである。

四 許六——不易流行を責しとせず——

許六きよくは去来きょらいへの「贈落柿舎去来書」において「千歳せんざい不易ふいぎ・一時いちじ流行りやうのふたつをもつて晋子しんこが本性ほんせいを論ろんぜらる、はかねて其角そのかくが器きをくわしくしりたまはざる故ゆゑなり。」として次のことがらを去来きょらいに示しす。其角そのかくは生来せいらい辛い境遇しんげいにあつたことはなく、平氣へいきで貴君ききみの書しよを改変かいへんして自書じしよの跋文はつぶんにしてしまふ、それは人に辱はめられたことがないか

らである。私は其角の方を持つことはない。(しかしながら) いろいろな俳諧選集を見ると、目立ったよい句はだいたい其角の句であり、彼の句におよぶ作者は門弟に見当たらない。——中略——師芭蕉が亡くなくなつて後、門弟の中に秀逸な句が出ないことはどう考えたらしいのか。

さらに許六は自説を述べていくが、不易流行にしぼってみると、次の批判がなされている。

①近年湖南・京師の門弟は、不易・流行の二つにまよひ、さび・しほりにくまされて、真の俳諧をとりうしなひたるといはんか——中略——不易・流行にくまさるといふは、予聞く。かつて趣向もうかまず、句づくりも出でざる以前に、不易の句をせん、流行の句をせんといへる作者、湖南の沙汰なり。

②翁在世のとき、予終に流行・不易をわけて案じたる事なし。句いで、師に呈す。よしはよし、あしきはあしきときはむる。——中略——よしと申さる、句、不易・流行おのづからあらわる、なり。滅後の今にいたつて猶しか也。かつて流行・不易を貴しとせず。よき句をするをもつて上手とも名人とももうすまじきや。

湖南・京師の門弟とは、大津や堅田の近江蕉門と、去来ら京都の門人たちを指す。かれらは芭蕉が「おくの細道」の旅を終えてから入門した第二次近江蕉門と呼ばれ、「我が輩、笈を幻住庵に荷ひ、棒を落柿舎に受けて、略そのおもむきを得たり。」と、元禄五年に入門した許六よりも四、六年早く芭蕉に親炙し、不易・流行につい

ては「門人知らずんばあるべからず。」(元禄十二年「旅寝論」去来)と強固な認識のもとにあった。短い江戸滞在であったが芭蕉から「軽み」の直指を受けた許六からみると、「あなたたちは『不易・流行』という二つの言葉に迷ひ、さび・しほりに気持ちを取られて、真の俳諧を見失っているのではないか」と見えてしまうのである。さらに、趣向も浮かばず句づくりもできないうちに、不易の句をつくろう、流行の句にしようといふ口走っている。そんな作者が湖南に在るといふ沙汰——うわさになっている、と苦言を呈している、慰めから始まっているが、だから其角にこんな辱めを受けるのだといわんばかりである。許六としては、其角は、才縦横で知的な華やかさをもつ、意表を突く新奇さで人々を驚かせる今や蕉門随一の名手であると擁護しているのである。

しかし去来にとっては芭蕉が残した蕉門という一俳諧流派が、その時代時代に新しい俳風をおこし、流行して世に示すことが重要であった。さきに見た其角に消されてしまった「句に千載不易のすがた有、一時流行のすがた有。此を両端におしへ給へども、その本一なり。一なるは共に風雅の誠をとればなり。不易の句を知らざれば本立がたく、流行の句を学びざれば風あらたならず。」という風雅の誠に基づく俳諧と、芭蕉の説を忠実に伝えることが去来の使命であった。中村幸彦氏は去来その人を「熟慮断行、所信をまげぬ儒教的な筋を通した人」と分析しておられる。「去来雑感」[中村幸彦著述集九]「不易の句は吐くけれども流行の「かるみの句」に移らない其角の姿勢は蕉門高弟にあるまじきことであった。

さて芭蕉が己に示した俳諧・俳論が蕉風のすべてと考える許六は、さらに、翁の前で不易の句、流行の句、と意識し、案じわけて句を作ったことはなく、「かつて流行・不易を貴しとせず。」とまで述べている。この時許六は文芸にはそれ以前にもっと精神的なものの必要性を感じていたと推測される。「贈落柿舎去来書」は同年十二月に去来が長文の「答許子問難弁」を執筆させることとなり、許六の「不易流行」を尊しとしない態度をいさめることになる。

五 去来「答許子問難弁」での不易流行

元禄十年十二月の去来返書「答許子問難弁」は、許六「贈落柿舎去来書」を三十章にわち、逐次その問いに答え、芭蕉の詞を伝えつつ自身の寄るところを述べる、芭蕉の直指をうけた者の自信にみちた返書であった。重要なものは、①其角に対する評価と②不易流行をめぐる問題である。まず許六が「諸集を見て目立つものは其角の句である」と褒めたことについて、去来は「感心せず」と言い切る。

許六は其角の新奇さ、華麗さに重きをおくが、去来の目には芭蕉没後の其角の句が、良いものもあるが益々奇をてらいある意味「世間平々」という。たまたまみる其角の句は十のうち良いものは二、三。その外は世間平々の句である、と。当時去来が手掛けていた浪化の撰集『有磯海・となみ山』に寄せた其角の句「千人が手を欄干や橋涼み」「寝心やこたつ布団の醒めぬうち」などは、かつての『いつを昔』（元禄三年其角編）の「からびたる三井の仁王や冬木

立」「新月やいつを昔の男山」といった句からすると平々の句である。しかも元禄九年の許六撰『韻塞』所収の「饅頭で人を尋ねよ山ざくら」など、去来は後の『旅寝論』で「誰を尋ねくるべしといへる句となん。さりとはいひたらず」と批判している。頼原退蔵氏は「去来の評した如き句意であるとすれば、これは所詮奇を追うたのみで、詩として求めるものはなかったと言わねばならぬ」⁽¹³⁾とされる。

次に「不易流行」に関して、許六が「趣向もうかばず、句づくりも出る前に、不易の句、流行の句と取沙汰するのは湖南の作者である」と非難したことについて、去来は「当風を願うことは平生心がけていることであり、趣向や句作と前後を論じてはならない」と許六と同意見を述べる。しかし、日頃親密な湖南・京都の俳人たちのことであるだけに丁寧だがやや過剰に弁明している。他、「さび・しおり」の問題、惟然や路通に対する態度についての弁護など、反論、同意ごもごもの懇切な返書である。

さらに、「句ならんとする時、或は新古の風出来る。その古風なるものは幾度も掃ひすて、ただ新風になはんとす。新風漸くいたりて句さだまる。しかれば、流行をおもふ事は趣向の後、句の前といはんか。又不易は……」等々、「不易流行」は句案の前にあるのではなく句案の過程にあることを説いた。これは創作の過程を許六に明かすことでもあり、さらに「或は奉納・賀・追悼・賢人義士の類の賛のごときは必ず不易を以て句案するを要とす。又着題・風吟・或は他門の人に対して当流をほのめかし、或は新風におしうつ

らんと稽古のごとき、皆流行の句を以て専らに案す」と、不易・流行にわけて句を作る必要があるという秘訣も示しているのである。

そのほか「不易流行」に関連して「一句の姿に俳諧あらば捨てるものはあるまじ」という許六の言に「阿兄思はざるの甚き也。一中略―その用捨時に有。」と厳しい口調のものもあるが、蕉門の後進に違いない許六には有益で去來の厚情に満ちた「答許子問難弁」であった。

この「答許子問難弁」に手ごたえを感じ、力を得た許六は、さらに元禄十一年三月「再呈落柿舎先生」を、膨大な自論「俳諧自讃之論」と「自得発明弁」を付して再度去來に書を贈る。ここに己が俳諧を悟得したのは「血脈の所」であると許六の「血脈論」が登場し、去來の考える「不易流行」とは別の資質の問題を挙げてくる。

予が大悟発明するといふ所は、去先生の論じ給ふ不易・流行の二つには非ず。一中略―俳諧の底を打ち破つて眼のさやをはづす。師の血脈を大悟したるものは、全く不易・流行の所を論ぜず、一向に血脈を失なはざる所を本意とす。〔俳諧自讃之論〕

この元禄十年から元禄十一年における去來・其角・許六の「不易流行」には、三者三様の理解がある。去來の伝える所は芭蕉が説いた「不易」と「流行」は正風と変風であり「風雅の誠」に根差すもので、かるみの「流行」が新風をもたらず。其角は「不易」を知れば流行はおのずとおし移るもので、重要なことは俳諧の「幻術」であると考える。許六の場合はそれ以前に伝統の中に脈打つ俳諧精神

ともいうべき血脈が前提である。このようにそれぞれの「不易流行」が蕉門高弟間にあつた。

許六が「再呈落柿舎先生」他の自論を去來に披歴し、その批評賛同をもとめる気持ちは切なるものがあつたと思われる。しかし当時去來は健康を害し、「再呈落柿舎先生」と付論は去來にあずけたままとつて『俳諧問答』は終わった。

六 『俳諧問答』のその後

元禄十一年九月に許六は初めての俳論書『篇突』を李由との共撰で井筒屋庄兵衛より刊行した。『篇突』は歳旦をはじめ主要な季題についてその式目・格式などを示す作法書でもあつた。また『篇突』は「再呈落柿舎先生」に付された「俳諧自讃之論」と「自得発明弁」再説の書であつて自論の「血脈説」もさらに強化されて登場する。

この『篇突』は発刊後井筒屋よりすみやかに長崎にあつた去來のもとに『続有磯海』『泊船集』とともに送られ、最も読んでほしい去來や長崎の卯七・魯丁・素行・牡年という真摯な蕉門俳人達の手におちた。

『篇突』を読む傘下の俳人達の質問に答えるまま、去來は未来の『去來抄』につながる初めての俳論書、『旅寝論』を元禄十二年(1699)三月に成立させることになつたのである。

注1 芭蕉が元禄二年「おくのほそ道」の旅を通して開眼したといわれ、同年冬から門人間に説いた蕉風俳諧の根本理念。不易とは永遠不変、流行は刻々の変化を意味する。両者は実は同一で、ともに風雅の誠にもとづくものだという。宇宙の根源的主宰者としての「造化」の、恒常不変の原理を「理」、生成創造の活動力を「氣」とし、その本体を「誠」とする宋学の考えに基づく。(俳文学大辞典)

2 貞享元年(1684)上方旅行中の其角を知って蕉風に近づき、やがて文通により芭蕉の教えを受けることとなった。貞享三年「其角歳旦帳」、「黠合」に入集。

3 尾形仿「芭蕉の本七・風雅のまこと・かるみ」。南信一「総釈去来の俳論」など

「軽み」に関する教説は「おくのほそ道」の旅を終えた上方滞留の間、不易流行論と相即する形で提示されたものにほかならなかった。いうならば「軽み」は、不易流行論にもとづく具体的な実践の指標だったといってもいい。

4 「尚白、これも上方の高弟也。師説を久しくへだてたれば、弥旧染の病発したり」(同門評判)。「その内に大津尚白に両度対して大意を求む。猶微細の所は集をもつて毎日探る——中略——その後予東武に官遊して其角に両席会す。俳諧稽古の為益なし」(俳諧自讃之論)。

5 李由 本名河野通賢。森川許六の雅友。彦根近郊平田村明照寺第十四世住職。元禄四年嵯峨落柿舎で芭蕉門入門。「韻塞」、「篇突」、「宇陀法師」を許六と共に撰じた。宝永二年没。去来が後見していた井波の浪化とも交わりが厚かった。

6 元禄七年六月十六日付許六宛芭蕉書簡

7 元禄十年閏二月去来は其角に「贈晋子其角書」を贈り、「蕉門高弟である其角子が不易の句についてはたいへん勝れているのに、流行の句におもむきが見られず、これは師芭蕉の教えを等閑にしていることである。そのため蕉門門人たちは混乱をしている」と難詰。其角はこれに返書せず、同年九月に書簡を改変して「贈晋涉川先生書」と名を変え、自撰の「末若葉」跋文として掲載した。これに対し去来門の風国が同年九月

選集「菊の香」に「贈晋涉川先生書」と去来の「贈晋子其角書」正文を並べて公表し、許六が萬目。同年冬去来へ書簡を出すにいたった。

8 延宝九年一月に京都信徳らの「七百五十韻」を継いで千句万尾させたもの。連中は芭蕉・其角・才磨・揚水。俳諧革新をすすめた高い評価の選集。のちの蕉風には遠いが「贈晋子其角書」に「師の風雅見及ぶところ次韻にあらたまり」とある。

許六俳諧選集「韻塞」(元禄九年十二月序)への投句に関する書簡と考えられる。(今栄蔵「連歌俳諧研究四十三」)(個人蔵・真蹟)

9 「不易流行」論争の発端「贈其角先生書」に対する其角加筆」山下 一海・『国文学』8巻5号・昭和38年4月

10 「其角の不易流行観」牧藍子「東大」国分学論集第三号「二〇〇八年五月

月

11 「俳諧自讃之論」

12 大津に乙州・智月、膳所に曲翠・正秀・酒堂らがあり、京都には去来はじめ風国や野明らがいた。

13 「其角」頼原退蔵「芭蕉と門人」昭和五十四年十月

参考論文・図書

「蕉風俳諧の形成と展開」尾形仿『尾形仿国文学論集』平成二十三年二月

「蕉風俳諧の展開」山下 一海「芭蕉の本七・風雅のまこと」昭和四十五年九月

「其角「去来」「許六」頼原退蔵「芭蕉と門人」昭和五十四年五月

『俳文学大辞典』

『去来先生全集』昭和五十七年九月

『古典俳文学全集一〇』

『鑑賞日本古典文学第33巻 俳句・俳論』昭和五十二年十月

『猿蓑序文』其日庵錦江『風俗文選通釈』所収 昭和四十九年九月

(ふじい・みほ) 大学院博士後期課程在学)

去来・許六 風交と論評の年譜

1694 元禄七年十月十二日 芭蕉没

1695 元禄八年一月十九日 許六あて書簡

応くといへど敲くや雪の門去来（不易にして流行のたゞ中を得たり・丈草）

去来「不玉宛書簡」

1696 元禄九年許六李由共撰『韻塞』

1697 元禄十年閏二月「贈晋子其角書」去来は不易流行説を論拠に

其角を難詰

五月「末若葉」其角は前書を改削跋にして公表

九月「菊の香」風国、「末若葉」跋と去来正文を掲載。

冬「贈落柿舎去来書」許六は芭蕉没後、蕉門を

僭称する俳人達や蕉門選集の杜撰を憂える。

また湖南京師の門人がいたずらに「不易流行・さび・しおり」を唱え真の俳諧を忘却していると非難

十二月「答許子問難弁」去来は許六の「不易流行・さび・しおり」を尊しとしない態度をいさめる。

1698 元禄十一年三月「再呈落柿舎先生」付「俳諧自讃之論」・「自得発明弁」・「同門評判」

六月下旬 去来は郷里長崎に帰郷、翌十二年十月

上旬まで滞在する。

九月 許六「篇突」井筒屋庄兵衛より刊行

十一月以降 長崎の去来のもとへ「続有磯海」泊

船集「篇突」が送られる。

1699 元禄十二年三月『旅寝論』成立

九月十六日 怒風、長崎で去来・野坡と一座。「旅

寝論」を写すか（居鳳與書）

九月末 去来出立十月帰洛

1700 元禄十三年三月十二日 芭蕉七回忌取越し追善興行

1701 元禄十四年

1702 元禄十五年 李由・許六「宇陀法師」を刊行。俳諧選集法と

頭書する。

1704 宝永元年九月十日 去来没

九月十五日 許六、去来宛書簡を認めるも出状せず

1705 宝永二年 李由没

1717 享保二年 豊後日田・風岡写「許去論評解」成る

1723 享保八年 中村逸丸「篇突」「許去論評解」を写すか

1728 享保十三年「落柿舎旅寝評論」居鳳写・九大

1761 宝暦十一年「去来湖東問答」松村桃鏡（刊本）